

フィロソフィア - 7

期末試験も終わり、ほっとしている頃でしょう。そんなときに試験の話で恐縮ですが、今日はバカロレアというフランスの国家試験について紹介したいと思います。フランスではフランス革命（1798年に始まる）のとき、教育を教会の手から奪って国家の独占にしようとなりました。その結果、義務教育という制度が始まります。そうして、フランス革命を收拾したナポレオン・ボナパルトが1808年に始めた国家試験がこのバカロレアといわれるものの始まりだそうです。ということは、200年の歴史があるということですね。

バカロレアは、大学への入学資格を得るための試験で、理科系、政治経済系、文化系の三種類があり、大学ごとに行うのではなく、全国をいくつかのブロックに分けて行われる。ちょっと日本のセンター試験と比べることが出来るかも知れません。しかし、その内容はまったく違います。それは、センター試験のような四択問題などではなく、記述試験である点。そうして、科目の中に哲学がある点です。日本では試験問題が主に知識の量を問うのに対し、フランスでは身につけた知識を生かしつつ、自分が考えたことをどれだけ論理的に展開できるかを試験すると言われます。上の三つのコースの中で最も難関なのは理科系の試験だそうです。理科系でも哲学は必修です。今年もさきほどの6月16日からこの試験が行われ、試験問題が公表されています。後学のために紹介します。どれも三つの問題から一つを選んで、4時間以内に解答するというものです。

理系

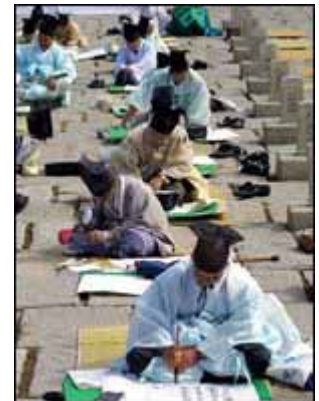
- 1, 文化は人間を変化させるか。
- 2, 人は事実に反して正当でいられるか。
- 3, パスカルの『パンセ』の抜粋（その一文が掲載される）を読んで解説せよ。

経済社会系

- 1, 「自由」は「平等」によって脅かされるか。
- 2, 「芸術」と「科学」はどちらがより必要であるか。
- 3, セネカの『善行について』の抜粋を読んで解説せよ。

文系

- 1, 人は科学的な仮説を証明することはできるのか。
- 2, 人間は自分自身に妄想せざるをえないものか。
- 3, ニーチェの『悦ばしき知識』の抜粋を読んで解説せよ。



つまり、1と2は問題に対して自分の意見を述べるもの、3はある哲学者の思想を解説するものという構成のようですね。1や2の問題に対しては、まずYESと仮定してその理由を述べる。そして、次のNOと仮定してその理由を述べる、その後で自分はYESと考えるかNOと考えるか、またはそのどちらでもないかと考えるかを表明し、その理由を述べる、というものだそうです。このような問題を解くことができるためには、高校の段階で哲学の科目をかなりまじめに勉強させるようです。

この試験を見て、最初に思ったのは、「どうやって採点するんやろか」という事です。ラジオで言っていたんですが、しっかりした専門のベテラン先生たちがいて、採点を行うようです。

ただ、西洋にはこのような出題とそれを解くという伝統があるのです。西洋では昔から修道院や司教座聖堂に付属の学校があったのですが、13世紀になると、教えたい人々と学びたい人々が集まり、組合を作って勉強をする場所ができました。それが university です。その機関に治外法権の特権を与え、

卒業した人に教授資格を認定したのが、ローマ教皇です。一番古いのがパリ大学なのですが、13世紀のパリ大学ではトマス・アクイナスを始め当時の最高の教授陣がそろっていました。

さて、授業はどうするかというと、まずは聖書と古典を読んでいく授業があります。本を読むことをラテン語では *lectio* (レクチオ) と言いますが、そこから授業のことを「レクチャー」と言うようになりました。しかし、レクチャーは最初の段階で、講師(まだ若い先生)の仕事でした。講師より上の教授となると、討論を担当せねばなりません。討論には二種類ありました。定期討論と任意討論の二つです。定期討論は、教授が前もって討論の主題を決めておくのですが、任意討論の場合はその場で主題が決めるのです。討論のやり方は、例えば「真理は認識できるか」という主題を出し、「真理は認識できない」と主張し、その理由を表明する。それに対して「真理は認識できる」と主張する側が、その論拠を表明し、教授が最後にまとめるという仕方です。

こういうことをしばしばしていたので、西欧のインテリは自分の意見を理路整然と説明することに慣れていけると言えます。トマス・アクイナスの『神学大全』はこのやり方をとっています。例えば、「神は存在するか」という問を見ると、最初に「神は存在しないと思われる、そのわけは」と言って二つの理由を挙げる。その次に「しかし反対に」と言って、聖書の言葉を引用する。そうして「答えて言わねばならない」として、「神は存在する」と主張する根拠を5つ述べる。その後で、最初に挙げた「神は存在しない」とした二つの理由に対して反論を挙げるという仕組みです。

トマスは、こういう討論の授業をするとき、発言をする学生(A)に「まず君が反駁する相手の論拠を述べなさい」と言って、それが済むと、相手の学生(B)に「今、A君が言ったことは、君の主張ですか」と尋ね、B君が承諾してから、A君に自分の意見を言わせたそうです。議論をする際には、まず相手の言わんとすることをしっかり理解してからせよ、ということですね。

ともかく、私を知る限りでは、スペインやイタリアでもフランスに似ている試験があります。しかし、それでは知識をたくさん身につけようとするのは劣っていることかと言えば、そうではありません。まずもって、ものを考えようにも一定の知識がなければ無理です。例えば、歴史で「江戸幕府の鎖国政策は後の日本にとって善かったのか悪かったのか」という問題が出たとしましょう。これに対し、江戸時代とその後の日本の歴史の具体的な史実を知らねば、とうていこの問には答えられないでしょう。また、論理的な文章を書けと言われても、まず漢字や熟語を知らなければ書けません。ということで、今みんながしている勉強は非常に大切です。ただ、みんなにも知識を身につけるだけでなく、「なぜ」と問うこともして欲しいです。そして「哲学の授業が、ばかげた科目ではない」ということを認識してもらえれば幸いです。

フランスでは高校の時に哲学の授業があり、バカロレアでも他の科目の2倍の配点を与えられていますが、別に大学に入ってから哲学を専攻する人はほとんどいません。ただ、哲学の授業で、ものごとの考え方と表現の仕方を学ぶことを重要視しているのです。私は、少しだけでいいから、哲学の大ざっぱな知識を持ってもらいたいと思います。また以前話したように、「哲学と言ってもいろいろござんす。馬鹿な哲学もありんす」ということも知ってもらいたい。そうすれば、別に劣等感を持つ必要はないから。きっとみんなの中にも国際社会で西欧人と仕事をする機会を持つ人も出てくるでしょう。そんなとき、平均的な日本人のもつ諸学問に関する幅広い知識に加えて、哲学とキリスト教の体系的な知識があれば、堂々と渡り合うことができるのではと思います。